

その風説のみ此歳も暮て。永祿三年の春と迎て。然るま
正月下旬。駿河の城主今川義元上洛して。足利の天下を補
佐し。四海一統の功と達んぐる。伊豆駿河遠江三河四箇國の
軍兵と牽従へ。不日ふ海道と馳登る。其沙汰。さうぐあり。され
ば信長それと听とひとく。先防戦の部伍。そと。満城の諸士を
呼集め。名との意權と同をれける。小佐久同信盛進出。左右と
顧て發言をりく。這遭義元上洛の風説何般りつて必定
ありん。其所謂いはんとこれと推す。今足利と補佐まき。斯波
細川へちゆやく衰へ。これが代え家とて。今川あらびへあるべうき。
義元ハ剛々東海道の國。大半是と領し。増て北条武田の
両家渠と助て在り。威勢すまく盛ふして。飛龍跳虎も
並ぶべく。然まれば誰うどれふ敵也。上洛をとと推通ると。遮り
止んとあらむ。蟠螭想て立車と囁。蝴蝶惑され。懸燈を倉
さんとまよふ異色。賢慮とちがひ。玉と。諫旨尾ふ
属。柴田林も詞と共ひ。實ふ信盛がゆす所。停用。りりく
安全の籌策こそ肝要されど。諫言をせども剛氣の信長用
ゆる色へあらうける。